

センター つくりん



子どもの風景 第12回

やきいも大会

龍(小3)

今日は、まちにまったやきいも大会でした。ぼくは、やきいもがいがいとすきなので、この日をずっとまっていた。

まず、やきいもがやけるまで、たてわり遊びをしました。けいどろでぼくがおになりました。そこで、じけんがおきました。すっちゃんをおいかけてみると、ぼくがすべってけがをしました。だけど、また立ち上がりつかまえました。

やきいもがやけました。ぼくは大きいやきいもを食べました。時間まで食べきれないと思ったけど、なんとか食べました。

やきいもはおいしかったし、たてわり遊びもおもしろかったです。

目次	2023年12月
子どもの風景(第12回)	1
特集 学校とジェンダー問題	
ジェンダー問題と学校教育 義務教育の最後にこそ、性のまとめを	遠藤 恵子 2
保護者として考える性教育	濱田 純子 6
学校の中のLGBTQ	熱海 千鶴 9
学校の中で感じるジェンダー問題	佐藤 日和 10
ジェンダー平等の視点から 今日の学校・教育の問題を考える	大山あけみ 12
授業への招待⑫ LGBTQの授業	数見 隆生 15
わたしの出会った先生 42	矢部智江子 19
教育時評 宮城県における運動部活動の地域移行の 現状と課題	山形 慎一 21
おすすめ映画	久保 健 22
読書のすすめ(第14回)	豊永 敏久 26
相談センター報告(第33回)	中野 典子 26
ひと言	内記 英明 27
子どもの風景 作品について	小幡佳緒里 28
センターの動き・編集後記	川村 美和 28

今、子どもたちの生きづらさが問題になっています。その一つに学校でのジェンダー問題があると指摘されています。研究センターでは、今までにジェンダーの問題を取り上げてきませんでした。学校でのジェンダーの問題はどこにあるのか、学校教育で何ができるのか、みなさんと共に考え合いたいと思います。

ジェンダー問題と学校教育

遠藤 恵子

1 宮城県における戦後の教育改革の経緯

戦後の三大教育改革「学区制」「総合制」「男女共学制」の原則のうち、特に「男女共学制」は、地域自治体によって取り組みにかなりのバラつきがあった。宮城県では、当時（1945年）の教育長をはじめ教育関係者たちは、基本的に高等学校の「男女共学」には反対の立場であった。彼等は「どうせGHQが去って行ったら、男女共学への圧力はなくなるだろう。それまでいろいろ言って（予算がないなど）、男女共学化を引き延ばそう」（宇野量介著『戦後の宮城教育を語る』）との策略を立て、宮城県立高校の男女共学化を阻んだのである。彼等は、とりわけ仙台二高・二高など、伝統校（ナンバースクールと呼ばれるいわゆるエリート高）の男女共学化は絶対に許せないと考えていた。結局、宮城県で全ての県立高校の男女共学が実現し

たのは、世紀を超えた2010年になってからであった。宮城県における県立高校教育のジェンダー問題には根深い背景があった。

なお、高校の男女別学を支持する意見の理由・根拠は、「別学の方がそれぞれの特性を活かせる。特に女子生徒は、女子だけで何でもできるリーダーシップの発揮も力仕事も何でも可能ということを高校時代に身につけることができる」というものである。しかしながら、社会は女性だけで構成されているわけではない。当然、中高年の男性も老齢や若年の男性も、さらには障がいのある男女も、外国人もLGBTの人々も、みんな重要な社会の構成員である。女子だけの高校生活の経験がそのまま、多様性に富む現実社会に通用するとは考えにくい。男女共学のなかでこそ、女子生徒もリーダーシップをとったり、力仕事も厭わない態度を身につけることが、大切である。高校時代という多感で考え方も柔軟な時期に「性別よりも個々人の

個性で得手・不得手がある」という現実を実体験しておくのが重要なのである。

そもそも税金で運営されている県立(公立)高校が、「男子だから」「女子だから」という性別によって入学どころか受験さえできないことは問題である。県立(公立)高校の男子校・女子校という男女別学制は、憲法違反と言っても過言ではない。宮城県は、戦後半世紀以上もの間、新設校や一部の農業高校・工業高校を除き、この男女別学制を強引に維持してきたのである。

2 学校教育とジェンダー問題の現状

次に、高校教育に限らず、学校教育とジェンダー問題について考えてみると、そこには実に多種多様で複雑に絡み合った問題があることがわかる。

社会一般では、「地域の慣習や家庭、企業や政治の世界ではまだまだジェンダー平等は達成されていないが、学校教育の分野は比較的男女平等・ジェンダー平等だろう」と思われている。確かに学校教育現場ではジェンダー平等にむけた様々な工夫や取り組みがなされてきた。最も分かりやすい例は、「家庭科の男女共修」「男女混合名簿の採用」等であろう。

そもそも「家庭科の女子のみ必修」は、1958年の文部省(当時)の学習指導要領編成時に遡るもので、中学校では男子は技術、女子は家庭の内容を学習することとなった。それ(1958年)までは、高校の「家庭科」は男女共選択科目であった。高校の家庭科女子のみ必修が決定的になったのは1970年からである。家庭科の女子のみ必修を主導したのは、世論であり、経済界の要請でもあった。当時の世論の背景には「女子にはその特性に合った教育を提供すべき」という「女子特性論」の考え方が根強かった。これを見直し、「家庭科の男女共修」に向けて動き出したのは、家庭科教師たちであった。同時に国際動向も「家庭科の男女共修」を後押しした。1985年、日本も国連決議「女子差別撤廃条約」を批准し、教育においても男女差別がでなくなってきたのである。ようやく「家庭科の男女共修」

が実現したのは、中学校では1993年、高校では1994年になってからであった。こうしてカリキュラム上の男女不平等はなくなつたように見える。

しかしながら、学校教育の現場にはジェンダー問題が誰にも気づかれずに潜んでいる。これを「隠れたカリキュラム」という。この「隠れたカリキュラム」を、学校教室の参与観察や進路希望・性別適正データによって体系的・実証的に分析したのは、木村涼子教授である(木村涼子著『学校文化とジェンダー』)。それによって、学校のなかで「女らしさ」が再生産され、生徒たち自身も「〇〇らしさ」を再生産していることが明らかになった。木村氏の指摘によれば、低学年のうちには女子児童も男子児童も同じように発言・発表するのに対し、高学年になるにつれ女子児童は挙手をためらうようになり、先生方も女子児童を指名しなくなる。男児は積極的であることが賞賛されるが、女児は控えめである方が歓迎されるのである。

こうした「隠れたカリキュラム」は、学校現場のあらゆるところに見られる。誰にもわかる例は、管理職に占める女性教員比率で、小学校の女性教員は6割以上なのに女性校長は2割にすぎない。このことから児童は「身近で世話や指導するのは女性だが、学校(組織)のトップは男性なのだ」というジェンダー意識を無自覚のうち身に付けてしまう。

女性教員の比率について見ると、小学校では62%、中学校では44%、高等学校では33%となっており(2019年)、初等教育には女性教員が多いが中等教育になるにつれ女性教員の比率は低下していく。また、小中学校の先生方の約60%が、女子児童の言葉遣いや礼儀作法について「女らしく」等の指導をしている。男子児童に対しては、運動などをやり抜く気力や泣いたときに「男らしく」等の指導をする先生方が30%弱いる。(笹原恵「ジェンダーの社会学——新潟市調査1994年」)

進路指導についても同様で、高校2年生や3年生が、進路指導の際、男子高校生が文学系や芸術系の進路を希望すると、「それでは将来家庭をもった時に妻子を養えるのか心配だ。再検討した方がよい」等、

親切なアドバイスを受けることがある。指導する先生方は、生徒本人のためを思って助言しているのだが、それはそのまま当該時代のジェンダーの現実を反映しているのである。こうして学校教育の現場で、ジェンダー問題（ジェンダーの不平等）が再生産されていく。男子生徒・男性は自由に進路を選ぶのが難しいという男性差別がまかり通っている。それは、現在の大学生の専攻分野の男女比率の偏りに如実に現れている。文学系や芸術系に男子学生は少なく、社会科学系（経済・法律等）や理系・工学系・農学系に大きく偏っている。逆に、特に工学系には女子学生が極端に少ない。このことは、さらに女子学生の就職状況、ひいては人生の過ごし方にも影響力が及ぶ。筆者自身が経験したことが、筆者の娘が高校3年次の三者面談の際、工学部希望を伝えたところ、担任の先生に「女の子が工学部に入ってどうするの？ 男子学生ばかりのなかで、疎外されるだろうし、工学部出の女の子なんて将来結婚もできないかも知れないよ」と、これまた親切的な助言だった。娘は、国語も社会も苦手、物理と数学だけが得意だったので、私（母親）は「この成績では、入れそうなのは工学部しかありません」と、担任の先生の反対を押し切って工学部に学び、結局一応建築家になった。普通の常識ある母親だったら、「先生のご助言はもっともだから、考え直した方がいいね」と、進路先を文系に変更していたかもしれない。

なお、教科書自体にもジェンダー問題が潜んでいる。教科書には、すぐれた童話や文学作品が取り上げられているが、主人公の73%は男の子で、女の子が主人公の場合は「かわいそうで、誰か（多くは男性）に救われる少女」として描かれている（天野・木村著『ジェンダーで学ぶ教育』）。例えば、『ちいちゃんのかげおくり』（あまみきみこ）では、戦争とかわいいた女の子、被害者としての女性が主人公となっている。『赤神と黒神』（松谷みよ子）は、女の幸せは男にあるという考え方が根底にある。男の子・男性が主人公の物語では、『モチモチの木』（斎藤隆介）や『木童うるし』（木下順二）のように男だけの世界であったり、男の子の友情・絆を描いた物語が多い。現在（2022年頃）、小中学生に人気ナンバー1の作品『走れメロス』

も、人気ナンバー2の『ごんぎつね』も主人公は男性である。これらの物語には、ほとんど女性の姿はない。わずかに垣間見えるのは、病気で助けを待っている主人公の母親である「ごんぎつね」。

さらに問題なのは挿絵である。小学校の「生活科」で栄養について学ぶ際、おやつとして、ミニトマトやクラッカーと牛乳が適切な例として挙げられている。確かに栄養については適切なのだが、その挿絵が問題で、お母さんがおやつを作って、新聞を片手にしたお父さんにおやつを差し出しているのである。国語の教科書では、「おはよう・おはよう」という「ひらがな」を教えるための挿絵に、朝の登校・出勤時の風景が猫かれているのだが、子どもたちの登校の様子とサラリーマン（男性たち）の出勤の様子と共に、それを見送る母親や布団を干す母親、庭掃除をしているお婆さんが描かれている。（小学校生活科教科書1993年）

これらの教科書には、表向きには性別役割分担やジェンダー不平等を肯定するような表現はない。しかし、こうした教科書で学んだ子どもたちは、知らず知らずのうち「男性は外で働くのが普通」「男性は強く勇気をもって、自ら運命を切り開く存在でなければならぬ」という無言のプレッシャーを感じざるを得ない。男児への差別である。一方、「女性は誰か（ほとんどは男性）の助けを待っていれば前途は開ける。子どもや老人、病人そして家族のケアこそが女性の使命であ



る」とのメッセージを教科書から受ける。

「隠れたカリキュラム」ではないが、近年見直しが進んでいる例は、男女混合名簿や児童生徒の持ち物の色等である。男女混合名簿については、宮城県では約80%の学校が導入している（2021年当時）が、いまだに導入していない学校がある。これについては、興味深い調査結果の報告がある。横浜市のある小学校高学年生（5年生）を対象に、一時的に男女別名簿を試行してみたところ、「男子が先・女子が後」の名簿は子どもたちにすんなり受け入れられたが、「女子が先・男子が後」の名簿には男の子たちが猛反発したというのである。これは何を物語っているのだろうか？ 学校のなかに社会・地域の旧来のジェンダー規範が入り込んでいないのだろうか。学校教育の現場は、社会を映す鏡でもある。児童生徒の持ち物については、ランドセルの色、習字用具入れの色、上靴のラインの色、制服の形状、体育着等々、枚挙にいとまがない。制服を廃止する中学・高校もかなり増えてきているが、まだまだ制服は広く浸透している。女子のズボンも認められるようにはなったものの、男子がスカートを着用することには、子どもたち自身抵抗感がつよい。女の子が茶色や紺色のランドセルを持っていても不審に思われることはないが、男の子が赤やピンクのランドセルを持っていると多くの人が違和感を抱く。やはり、学校教育の現場は、社会を映す鏡なのである。女性が男性同様の服装や行動をすることは容認するが、男性が女性のよくな服装や行動をすることには違和感をもつ、ということには二重のジェンダー問題がある。第一には「男性こそが人間の標準であり、女性は二流人間なので、女性は頑張つて男性並みになるのが望ましい」という男尊女卑の思想である。第二には、「男性は女性のお手本・目標であるべき」という男性へのプレッシャー・抑圧である。

男女別学制という制度自体がジェンダー問題（ジェンダー不平等）であるが、この制度は当該学校の卒業生や在校生のジェンダー認識に影響を与える。少し古いデータだが、「1994～1995年東京都の成人および高校生の性差意識調査」（江原由美子他著）によると、①高校生の性差意識は成人男性より強い傾向がある。②男子に

おいては、共学男子と別学男子の差異は非常に大きい。③高校生では、女子の方が性差意識は弱いのだが、共学男子の意識は別学男子より女子に近い、ということが明らかとなった。すなわち男女別学制は、とりわけ男子高の男子生徒にジェンダー不平等の意識を植え付けているのである。同様のことが、仙台市でも確認されている。（21世紀をひらくみやぎ女性のつどい「共学化その先に目指すもの」2008年10月）。

3 学校教育におけるジェンダー問題解消に向けて

学校教育の現場は地域社会におけるジェンダー不平等を反映している。一見、学校教育はジェンダー平等を実現しているかのように見えるが、それは「隠れたカリキュラム」によつて潜在化している。確かに現場の先生方は、ジェンダー問題を何とか解決しようと努力しているのだが、多くの先生方は「隠れたカリキュラム」に無意識に影響されている。まずは、ひとりひとりの先生が「何が、どこで、どのように隠れたカリキュラムになっているか」チェックする必要がある。それには、先生方がジェンダーについてキチンとした理解・認識を確立していなければならない。

また、学校教育の現場に政治が介入し、先生方の努力が踏みにじられる場合すらある。その典型的な例は、「七生養護学校事件」である。ご存じの方も多いと思うが、2003年に東京都立七生養護学校で実施されていた性教育に対し、都知事や都議会議員が不当に介入し「不適切・異常な教育」と断罪し、七生養護学校の校長・教員の降格および停職の懲戒処分とした。この事件の余波は国政にも及び、自民党は2005年に「過激な性教育・ジェンダーフリー教育実態調査プロジェクトチーム」を発足した。その影響は極めて大きく、日本全体の性教育が後退し今日にまで及んでいる。校長・教員たちは、懲戒処分を不当として裁判に訴えたが、それには時間がかかり、原告（校長・教員）の勝訴が確定したのは2013年になってからであった。学校教育に政治の不当介入は、断じて許してはならない。

最後に、各自治体は、学校現場の全教職員がジェンダー研修を受

ける機会を毎年数回・数時間設けるべきである。「ジェンダーとは何か、ジェンダー平等とはどういう状況なのか」ということを理解し、実施してみて、初めてジェンダー問題の解消が可能なのである。ちなみに私たち「県立高校共学教育の充実を求める会」は、宮城県に

対し「県教職員全員へのジェンダー研修機会の確保」を訴え続けている。

(宮城学院大学名誉教授)

義務教育の最後にこそ、性のまとめを

濱田純子

1 はじめに

生徒たちが最後の定期テストが終わったなら、養護教諭としてどうしてもやりたいことが二つ。一つは卒業前の体位測定、もう一つは性のまとめの授業。義務教育の9年間でこんなに成長したということとを本人にも保護者にも実感してほしい。そして、一緒に学べるうちに性について基礎的な知識を身に付けてほしい。

この時期はすでに進学先が決定した生徒もいるが、多くは公立高校の受験まであとわずかだ。合格発表を待たずに卒業式。義務教育修了の安堵と合格発表まで待つだけの落ち着きのない数日。多くは高等学校に進学していくが、様々な理由で進学できない生徒もいる。折角入学したのに、1年未満で進路変更したと聞こえてくる生徒もいる。義務教育を修了した後の進路は様々で、平等に学ぶ機会が保障されているのは義務教育期間だけであることを痛感させられる。学校現場の年度末は、それぞれの立場で時間が欲しいと思っただけで確保してもらおう2時間。始めは時間がほしいと交渉していたの

が、いつの頃からか来年度の予定を教務が聞いてくれるようになり、本校ではこの授業を必須の学校行事として認知してもらえた気がする。さて、今年の3年生はどんな反応をしてくれるかな。昨年の反省点を改善して、「楽しかったし、ためになった」と思ってもらえる授業にしたいと毎年準備をしている。

2 性教育をしなければ、と煽られる感覚

しっかりとした性教育を組み立てて実践している方がいる中で、3年間だった2時間の授業をしているだけの私が、性教育を語っているのだろうかと思う。ただそれでも、私の中では1年の締めくくりに大きな仕事のひとつと位置付けており、授業改善を意識して1年をかけて少しずつ作り変えている。

私の中には「性教育をしなければ」という自分自身に煽られるような感覚がある。はじめは保健室で個別の事例について、性についてイチから保健指導するという感じだった。性に関する事例が増え

て、イチから指導する時間的な限界と、相談につながる事例もあることを考えると、特定の生徒だけに指導しては間に合わないと感じ始めた。さらに、私自身の不妊治療を話していた人から、「わが子には子宮がない」と思いがけない相談を受けたことも大きかった。活発なお子さんにも先天的な特徴があることは、教えられなければ全く知る由のないことだった。一方で、私がこれまで関わってきた児童生徒の中にも類似した事例があったのかもしれないし、現在進行形なのかもしれないと気づき怖くなった。何の迷いもなく「発達の時期は違うが、みんなに初経や精通がある」と話し、「異性への興味関心」も20年前の私は疑問も違和感もなく伝えていた。学校生活に配慮が必要でなければ伝えて伝える必要のないことであり、社会的にも平気で差別的な言葉を笑うことに何の抵抗もない時代といえそうだが、その陰で私の授業を受けたために深く傷つき、悩んだ生徒がいたかもしれないと思うと、無知であることがいかに恐ろしいことか思い知らされた出来事だった。また、今でこそ高等学校の教科書に載るようになった妊孕性^{にんまう}という言葉も、私は不妊治療をする中でその事実を知った。女性のライフイベントを考える上で、知らずに後悔する人も多いことも知った。社会の様々な事件や偏見も、性について無知であることが根本的な原因であることも少なくないと感じる。溢れる情報の中から必要なものを選択できるのも、正しい知識があつてこそではないか。言葉だけでも聞いたことがあるとか知っていると感じるだけで、選択の幅が広がる。生きていく上で、性は知っていて当たり前で大切なこと。学校で学ぶことで性に対する認識を自分事として前向きにとらえてほしいと考えている。

3 人生をデザインするために

性教育関連のサイトでステキなフレーズを見つけた。(性について学ぶことは、自分の人生を主体的に生きるために絶対に必要なのだ) このメッセージを生徒たちに伝えたい。昨年の授業のメインは性的同意に決めた。

授業の導入は、生徒が素直な気持ちで授業に参加するために大事な時間だ。今回は人間の三大欲求から始めることにした。食欲・睡眠欲・性欲。誰にでも備わっている欲求だが、その強弱は様々であること。食欲に任せていては、肥満や生活習慣病などを引き起こし、QOL(クオリティ・オブ・ライフ)を低下させたり、命の危険さえ引き起こす。しかし、食べ方を知りコントロールできれば、健康維持に役立つ。楽しみの一つになる。同様に、性欲も欲求のままに行動すれば犯罪にもなるし、人生設計の変更を余儀なくされたり、感染症に罹患することでQOLを低下させたり、命の危険さえ引き起こす。性を知ること、主体的な人生設計につながり人間関係構築にも役立つ。だから、世の中にあふれる情報から何が正しいのか、娯楽として楽しむものはどれかを選別できるようにしてほしいと伝えていく。車の運転も分かりやすい例の一つ。車を動かすことは難しくないが、免許を取るためには基本を学び、操作の練習をして試験に合格しなければならぬ。免許を取得しても安全に気を付けなければ、他人や自分を傷つけたり命を奪うことになるが、安全第一であれば車は便利で快適な乗り物になる。同様に、性についても興味だけでセックスをすれば、相手や自分を傷つけたり犯罪にもなってしまうが、知識を身に付けて安全に行動すれば、豊かな人生を送るための一つになる。わかりやすい例えでかしまらず、リラックスした雰囲気になることを意識した時間にしていく。

授業で扱う内容は、性的同意、PMS(月経前症候群)や周期など月経に関すること、避妊、緊急避妊、中絶、特別養子縁組、性感症、セルフプレジャー、性の多様性など基本的なことを盛り込んでいる。

展開の最初は、中学生の恋愛を扱った新聞記事を使い、自分事として考えられるようにしている。生徒の意見を反映させたいが、手を挙げるどころか自由な発言さえ遠慮する空気は否めない。そこで、記事中の登場人物の気持ち想像させる形でグループフォームで回答させてみた。瞬時に結果が分かり、自分の意見ではないので発言もしやすくなり、空気が和む。ここから、性的同意について展開し

ていく。どんなに親しい関係になっても、言葉で確認しなければレ
イプになり犯罪になることを動画も使いながら理解させる。

また、授業に動きのある活動を取入れたいと思い、産婦人科医
の高橋幸子先生考案の性感感染症ゲームを取り入れている。このワー
クを通して、検査をしなければ感染の有無を確認できないこと、コ
ンドームをすれば感染予防になることを視覚的に理解できるように
している。

性の多様性については、授業をはじめた頃に比べて社会全体の認
知が進み、生徒にとつて特別感あまりないように感じる。「推し」
がとか、好きなアニメのキャラクターがとか自分の身近に多様性を
感じているようだ。直近の社会問題等も入れながら理解を深めさせ
たいと思っている。

4 ハイブリッドな授業で

性教育を婦人科医や助産師等の専門家に任せるスタイルも多いと
聞く。専門家だからこそ話せる内容がたくさんあるのは事実だが、
生徒が知っておくべき内容を限られた時間に網羅してくれる専門家
を探すことはとても困難だ。しかし正直なところ、男性の性や中絶
など話しにくいと感じる内容があるのも事実だ。話しにくいことほ
ど生徒の知りたいことであることも多く、そこから逃げないことも
必要である。学校ではコロナ禍を経てICT活用が急速に進み、普
段の授業でも当たり前に活用されている。性教育もこれを取り入れ
ない手はない。世の中には性教育関連の動画がたくさんあり、様々
な年代に合うようにアニメを使ったり、専門家が話しているものが
ある。前述の高橋先生の動画もシリーズ化されており、使用につい
てメールで快諾もいただいた。専門家の動画に任せたい内容と自分
の言葉で進めたい内容を組み合わせ（ハイブリット）、時間配分も容
易になった。

5 生徒の反応

この授業が生徒に告知されると、「楽しみ」とか、「恥ずかしい」とか、

「やばくない？」など様々な反応が見られる。しかし、授業後の感想
を見るとどれも驚くほど真剣でまじめだ。「自分だけの意見を押し付
けず、相手と話し合うことが大切だと学んだ」「一つひとつを考え、
責任を持った行動ができると思った」「将来、妊娠したいと思わない
ときは避妊具を使って、自分や相手のために気を付けたい」「間違っ
た道に進まないための道標として使えそう」「もし自分に困ったこと
があった時に、今日学んだことを思い出して冷静に対処したいと思
う」「自分の身の回りにセクシャリティが自分と違う人がいた時に活
用したい」「大事な場面で自分や相手を傷つけないようにしっかり活
用したい」「性への理解を深め、自分のことも他の人のことも理解し
ていきたい」紹介したい感想はまだまだあるが、これだけでもしっ
かり自分の人生や相手のことを考えるきっかけになっていると感じ
る。

数年前、授業直後に「相談がある」と言った生徒がいた。放課後、
誰にも聞かれないように相談したいといい、ドアにカギをかけ廊下
からは相談者の様子が見えながらも会話の内容は守られる状態で相
談が始まった。「自分はゲイです」。全く予想しない告白だった。し
かし思い返せば、昼休みの保健室で何度かからかわれるような場面
があり、私はその都度「だからといって、何が悪いのか」とあえて
全体の雰囲気調整することに努めることがあった。そのことが信
用につながったのか、唐突な告白に内心驚きながらも当事者の書い
た多様性に関する本を紙袋に入れて渡しながら、「今はSNSで自分
に合ったコミュニティを探しやすい時代だから、きつと理解してく
れる人たちに会えると思うよ」と伝えた。彼は「今後、カミング
アウトはしないと思う」と言って卒業していった。また、ある日の
夕方の職員室に卒業生から電話がかかってきたこともあった。唐突
に「緊急避妊って何時間以内だっけ？」と言ひ、聞けば知人にレイ
プされてしまったが、授業を思い出してまだ方法はあるかもしれない
と思つたという。どんなに安全運転していても交通事故に巻き込
まれることがあるように、普通に生活していても困難に会うこと
がある。その時にどう対応できるかで予後は明らかに違ってくる。

彼女が遭遇した事件を思うと苦しくなるが、それでも最悪を避けるための方法がまだあるかもしれないと考えてくれたことはうれしかった。

学校現場が一番危惧するところは保護者の反応かもしれないが、私は一度もこの授業に関して批判を受けたことがない。生徒に必要な学習であればやらない理由は何もないし、やらなければならぬ

のではないか。養護教諭として生徒に性の授業をしている私だが、母親として娘に性について語るのは難しさを感じるのも事実である。学校で学んだことを下地に親子で性について語ることができれば、それが一番効果的な性教育となるのではないだろうか。

(東松島市立鳴瀬未来中・養護教諭)

保護者として考える性教育

熱海千鶴

ここ数年若者が性犯罪を起こすニュースを、残念ながらも目にすることが増えたように思います。私の息子も23歳なので、他人事ではありませんが。

ではなぜ、若者の性犯罪が増えているのか？それは日本の性教育の遅れにあると私は思います。どのくらい遅れているのか気になり現在の保健体育の教科書を確認したところ、私が中学生だった30年前から内容がまったく変わっていませんでした。

昔とは違い、今は誰もが自分の得たい情報を簡単にインターネットで知ることのできる時代。子どもたちも大人・学校が教えてくれない情報をインターネット、アダルトサイトから得ています。このアダルトサイトの動画。ほとんどが女性と強引にセックスをするという内容が多いということ、皆さんはご存知でしょうか？ 普段AVをみない女性である私たち母親はそんな事実も知らないですよね。私も驚きました。そしてこう思いました。セッ

クスを知らない若者が、女性の同意を求めず強引にセックスをしている動画をみたら、それが正しいセックスなのだと勘違いしてしまうのは当たり前ではないかと……と。

原稿を書くにあたりここ数年の性犯罪の件数と被害者の年齢層も調べてみましたが、恐ろしい結果が……。2018年からの強制性交犯罪の認知件数のうち被害者の年齢は20代以下の女性が8割。10代以下は4割と子ども・若者が圧倒的に多く、このうち1割が男性も被害にあっているという結果で、性犯罪の件数は年々増加していました。統計は支援センターや警察に相談してくれたからこそその件数で、周囲に相談もできずにいる子どもたちもいると思います。私も含めて、この実情を知らなかったということこそ大きな問題であると思いました。

日本人は「性」について無頓着すぎます。大人が正しい「性」の知識を持っていないのに、子どもたちにどうやって教えるのでしょ

う。まず、私たち大人が正しい知識を改めて学ぶ必要があると私は思います。そして性犯罪・性暴力を他人事としてとらえずに知ること。私たち一人ひとりの意識改革が必要です。シンプルに『正しい大人が正しく伝える』べきです。

そして教える時期も見直すべきだと思います。幼稚園から男の子と女の子の違いを教える。それぞれの違いを理解させ、お互いを尊重する関係を小さい頃から教えていくべきではないでしょうか。

SDGsではジェンダー平等の実現という目標をかかげ、来年仙台ではパートナーシップ制度が始まります。男性・女性の在り方が見直され始めた今、自身の性を改めて知り、子どもたちに、これからの世代にどう伝えていくか。変わってこなかった日本の性教育が変わるタイミングがきたのだと思います。

(東松島市在住)

学校の中のLGBTQ

LGBTQとはレスビアン（L）ゲイ（G）バイセクシュアル（B）トランスジェンダー（T）クィアまたはクエスチョニング（Q）で、いわゆる性的少数者の総称

佐藤日和

「お花の首が折れていたの。保健室で治せませんか？」

小学校に勤務していたとき、2年生の男の子がその花を持って保健室にきました。その子は話し方や仕草が、どこことなく女の子らしい雰囲気がありました。一緒に遊ぶ仲間も女子。いつも女子トークの中心で楽しそうにしていました。綺麗なものや可愛いものが大好きで、将来の夢は美容師だったと思います。卒業後、小学校の運動会に遊びに来てくれましたが、仲良しの女子たちと一緒にしゃべっていました。中学生になっても、あの子らしくいられて良かったと安堵したことを覚えています。

とは言え、その子の心の中はどうかでしょう。思春期になり、人知れず悩んでいたかもしれません。そのうち保健室に相談に来るかもと思いついて、LGBTQの研修会に参加するなど、私なりに準備をしてみました。当事者の方から「保健室にさりげなく虹色のパンフレットやポスターを置いておくと良いですよ」と教えて頂き、そうしていましたが、卒業まで相談されることはありませんでした。保護者は我が子の特徴に気づいていたと思います。受容的な母親だったので、余計なこと言わずに見守っていたのではないかと思います。

それから間もなく、私は中学校に転勤しました。

〈中学校の制服〉

最近では、多くの学校でスカートかパンツを選択できるようになりました。トランスジェンダーの人にとって性自認と異なる服を着ることは、違和感や嫌悪感、苦痛以外の何ものでもないでしょう。その一方で、周りの目を気にして、ありのままの自分をひた隠している人もいると思います。苦痛を感じつつも周りに気づかれないうような息を潜めることは、どれ程の苦しみでしょうか。

以前、発達障害の生徒から、「中学校の朝会は、体育館全体が黒っぽくて重苦しい雰囲気がある」と言われたことがありました。確かに小学校はいろいろな色が混じっていてカラフルです。一方、中学校の制服は暗い色で、更に当時は、靴下の色や長さ、ヘアスタイル、スカートの丈など、事細かに注意されるのですから、一層、重苦しく感じたことでしょう。その生徒には、学校は自分らしさを出してはいけない、窮屈で安心感のない場所のように思われたのかもしれませんが、自分らしくいられないことは、LGBTQや発達障害に限らず、誰にとっても苦しいことですね。

〈内科検診〉

以前の内科検診は『男子は上半身裸』が当たり前でした。（※健康診断はもちろん男女別で行います。ちなみに名簿は健康診断だけが

男女別名簿で、それ以外は混合名簿でした。男子の中には「えー？裸？」と言う人もいましたが、そんな時は「プールの時、上半身裸なんだからいいでしょ！」と一喝していました。でもあるとき、脱いだシャツで胸を覆い、ぎりぎりまでシャツを離そうとしない男子がいました。「ああ、この子にとっては辛いことなんだ……」そのことに気づいてからは、男子も1枚服を着てよいことにし、女子と同様について立てて囲い、シャツをまくり上げて健診するように変更しました。

その子がLGBTQかどうかは別として、思春期ともなれば、体毛が濃くなる等の変化があり、恥ずかしいと感じる生徒はいらっしゃいます。男性らしい体つきの子、幼さが残る体型の子、ぼつちやりさんやほつさりさん、皮膚炎のために肌を出したくない人、リストカットの傷を気にする人もいます。「男子は上半身裸！」は、当時は当たり前だったとは言え、生徒への配慮が足りなかったことを反省しています。

〈水泳の授業〉

水泳の授業はここ数年で大分、様変わりしました。水着はスクール水着に限らず、華美な色、形でなければオーケーです。セパレートタイプが人気で、体型だけでなくアトピー性皮膚炎や日焼けを気にして袖ありの水着の人もいました。水着を選べるようになったのは良いことだと思います。

〈トイレ〉

トイレを生徒の溜まり場にしないため、教師の目が届くようにと、廊下とトイレを仕切る扉のガラスは透明のガラスでした。そのため、男子は小便器で用を足す後ろ姿や横姿が、廊下から丸見えの状態だったので、とても嫌だったと思います。数年前、生徒指導担当に相談し、透明のガラスに目隠しの紙を貼って貰いました。その後しばらくして、トイレの改修工事が入り、廊下から見えないような扉になりました。男子の個室も増えて良かったです。できれば男子も女子と同様に、全部個室だと、尚、良かったのですが……。性別に関係なく入れるトイレは、唯一、車椅子用のトイレだけでしたが、1箇所だけでも、そういうトイレがあつて良かったです。でもLGBTQの割合からしたら全然足りませんね。

〈自分は男性かも……〉

ある日、保健室に来室した女生徒から「自分はたぶん男性だと思う」と打ち明けられました。正直、驚きましたが「大事なことを話してくれてありがとう」と伝え、許可をもらって保護者にも伝えました。しかし保護者からは「そんなこと絶対にあり得ません。小さい頃からあの子は心底、女子でしたから」と言われました。

その生徒は、幻覚や脅迫症状等があり、一時期、精神科に通院しましたが、保護者が精神科受診をよく思わず、受診はすぐに途絶えました。学校にいるとすぐく疲れるようで、何とか保健室までは登校することも認めず、そういうことが彼女を更に苦しめていたようでした。「自分は男性かも」と言ったことを親に注意されたのかは分かりませんが、その後はそのことを一切口にしなくなりました。勇気を振り絞って伝えてくれたのに、何もできず申し訳なかつたです。その一方で「自分は男性かも」と言っ



たのは、精神状態が不安定なために、アイデンティティーが定まらず、自分は何者なのか、女性か男性かすら分からなくなり、口にした言葉だったかも？ と思ったりもしました。その後、その生徒は卒業までスカート履いて、毎日、別室に登校し（保健室にもほぼ毎日来室しました）、憧れの先輩が通う通信の高校に進学しました。

〈まずは知ることから〉

LGBTQについて少しは理解していると思っていた自分ですが、ある時テレビに出ていた同性愛者を「気持ち悪い」と言ってしまう、娘から「偏見！」と叱られたことがありました。それまで私は、同性愛者は自分で選んで同性を好きになつていふと思つていました。性的指向を性的嗜好と間違えて理解していたのです。多くの人が自然に異性を好きになるように、その人も自然に好きになつた人が同性だっただけ。決して選んだのではなく、生まれながらにそのような

であり、努力で変えられるものではないことを後になって知りました。マスコミの前で同性愛者を気持ち悪いと発言した政治家も、無知ゆえの発言だったのでしよう。子どもの頃から『男は男らしく、女は女らしく』と教えられてきた熟年世代が、一番理解するのが難しい年代なのかもしれません。でも、政治家であるなら尚のこと、知る努力をすべきです。

LGBTQは11人に1人の割合でいるとのこと、クラスに2〜3人はいることになりました。生きづらさを抱えた不登校生徒の中にも、保護者や同僚の中にもいるでしょう。自分の周りに必ずいるという意識が大切なのだそうです。まずは知ること。知ろうとすること。LGBTQに限らず、違いを認め、尊重し合い、安心感のある学校になることを願います。

（仙台市・元養護教諭）

学校の中で感じるジェンダー問題

大山 あけみ

ジェンダーギャップ指数が低い日本でも、教育、保健はトップレベルと思われていますが、識字率、初等教育の指数で男女格差はありませんが、中等教育、高等教育段階では100位を下回っている状況です。学校は表向きには、教育の機会「均等」を表明し、共学になり、同じ教科を習うようになりましたが、日々の実践のなかで、

性差別を秘かに伝達するメカニズムがあることに自覚的であればいけないと思います。

男女で別の授業をする教科はほぼなくなっています。体育の授業でも、ダンスや柔道など選択性になり、男女一緒にしたり必要に応じて分けたりしてゲームをしています。どの教科書を見ても、女性

が家事育児をするような挿絵や写真はなくなり、社会で働くことに男女の差がないように作られています。しかし、「女子は国語が得意で、男子は理数系が得意」のような無意識の思い込みは、理数系の成績が良い女子に対して「女子なのに、数学や理科の点数がいいね」と声をかけたり、読書の好きな男子に「もつと運動したら」と励ましたりすることがあります。また、教室内で男子が活動的で雄弁に話していても気にしないのに、女子の場合は引かれたり「女のくせに……」と言われたりすることがあり、「沈黙は美」のような雰囲気や求められたりします。そうした雰囲気はいつの間にかつくられま

す。家庭科で調理実習のグループ決めをする時、男女混合のグループを求めても、奇数で上手くない場合があったり、お休みでどちらかが1名になったりすることがあります。それは当たり前のことなのに、妙に男女を意識して滞ってしまうのはなぜでしょう。こうしたことは、校外学習や修学旅行のグループやバスの座席決めでもよくあります。そうしたことが起こらないようにと、担任が「出席番号順にします」「右は女子、左は男子」と意見や希望を聞かずに「授業の一環だから」と決めてしまう。本当にこれで子どもの自主性は育つのでしょうか。面倒でも意見を聞き、みんなで楽しくやっていく方法を考え、折り合いをつけることを学んでいくのが学校だと考えます。

体は女性だが気持ちはずいといけず、だからといって男性とも違うと思うている生徒がいました。性別に〇をつけることにも抵抗があることを担任や親しい友達には話していました。周囲も彼女はそんなものだと思われていて、中2になり彼女を受け入れてくれた先生とクラスの雰囲気、自分らしく素直になつていいと思えたのでしょうか。そうしたクラスには、先ほどのグループ決めの問題は起こりにくく、起こっても解決できる力があります。こじれる傾向が多いのは、「こうあるべき」という姿にもついでこうとする教員が担任の場合に多いように感じます。

また、男子・女子のジェンダー呼称では「〇〇さん」が奨励されていますが、「〇〇ちゃん」「〇〇君」または呼び捨てで、集団の統

制を無意識に行い、強い者と守られる者のような存在を作り出しているように感じます。誰に対しても「〇〇さん」と呼び合えるクラスにはいじめが起きないと言われたことがありましたが、一人ひとりを尊重する気持ちの表れが「さん」に込められているように思います。教師自身が振り返るべき原点だと考えます。

ジェンダーの効果は、身体の形式化を通じて生産されるそうです。そう考えると「制服」はその最たるものではないかと思えます。現在は「奨励服」といわれていますが、着こなし方に様々な制限が伴います。各学校によって異なりますが、基本、男子はスラックス、女子はスカートです。女子でもスラックスを認める学校は増えていきます。寒さ対策で、スカートの下にはく靴下やタイツは毎年議論になります。レギンスはだめなのか、肌色のタイツをはく人はいない、ストッキングはお金がかかる、黒のタイツに靴下が白はおかしいなど様々です。また男子においても詰襟のガクランは苦しいという生徒もいます。人それぞれ体形も違い、暑さ寒さを感じる温度も異なり、健康的に生活していくうえで活動しやすい服装を判断できる力を身につけ、個性も表現できる服装を考えていくことが大事だと思



ます。髪型や化粧など子どもだからダメなのか、天然パーマや縮れ毛、茶色の髪など生まれながらの色や癖毛に悩んでいる人が、縮毛矯正パーマは許され、黒髪を強制させられ染めさせられることに何の目的があるのだろうかと思います。校則や申し合わせ事項を、ジェンダーの視点から見直す時にきていると思います。

また幼少期からなにげなく耳にし、日常的に繰り返されるメディアのジェンダー化されたメッセージは、「形式的な反復行為によって、制度化されるアンデントリーティ」をつくりあげるそうです。

昨年、「共学教育の充実を求める会」で行ったシンポジウム「県立高等学校の今く共学教育の現状」で、パネリストを、中学2年生で生徒会長に立候補したが落選し、庶務として会長以上の活躍をみせた女子にお願いしました。彼女の進学した高校には生徒会がなく、行事は有志が集まって企画運営するスタイルで、文化祭実行委員になり率先して活動していました。パネリストを引き受けてくれた彼女の話は、耳を疑うものでした。その一つは、生徒総会のような全員参加の会で、男子から「校歌にある『雄々しく』は、共学に合わないので変えたほうがいい」という提案が出されたそうです。しかし出席していた女子から「女子も『雄々しく』頑張ることはできる」と意見が出され、男子の提案は却下されたそうです。ジェンダーの視点から男子が提案したことに、女子が反対するという現状に「男子のように女子も頑張れるのだ」と言いたい気持ちかわかりつつ、「校歌」というものに託される「校風」を、再度考える機会を作って欲しいと願わざるを得ませんでした。また、文化祭実行委員の活動を通して、「女子は支える側でいること」で円滑に進むことを体験した」と話す彼女に、この2年3か月の間に何が起ったのか聞いてみたかったし、もともとそう考えたのかを聞けないまま別れてしまったことを後悔しています。

生徒会選挙があり、生徒会長に女子3名・男子2名、副会長に女子3名・男子2名が立候補しました。教員の中では責任感もあり話し方も上手く1年時から生徒会役員をしていた女子が会長になると思っていました。思春期で見た目のカッコよ

さはつちやけた行動に魅力を感じる傾向があると同時に、リーダーは男子で女子は補助ということ

を無意識に選択しているのではないのでしょうか。子ども向けメディアでは、「男の子向け」とされるストーリーは、科学技術を基盤に「悪の帝国」と戦う物語が定番で、地球防衛、武装、正義、パワーアップという言葉が多く、「女の子向け」の定番はプリンセスストーリーで、非科学的な魔法を使って「変身」し、王子依存の愛と夢を求める物語が描かれてきました。こうした性別ステレオタイプは、決まった役割の押し付けにつながっているように思えます。

性別による不平等が見えにくい「能力主義」と「平等原則」の学校の中で、表向きには機会の「均等」を保障し、男女に同一の教科を教えるとしても、日々の教育実践のなかで、ジェンダー・バイアスを生成・再生産させていないかを振り返られる教師でいたいと思います。

(仙台市・中学校教員)



ジェンダー平等の視点から

今日の学校・教育の問題を考える

数見隆生

1 私の性・ジェンダー教育との関わりとその出発

私が宮城教育大学の保健体育科教員として着任し、子どもの健康問題や保健科目の担当者になったのは1971年で、もうかれこれ50余年も前のことである。当時は、ジェンダーという言葉はもちろん性教育といった科目を扱う講義なども宮教大や教員養成大学だけでなく、どの大学でも皆無に近かった。私自身も赴任当初は、そうした教育内容への意識は低かったが、60年代の経済成長に伴う情報化社会の到来が、メディア文化を普及させ、様々な性情報が回るようになり、若者の性行動等にも大きく影響を及ぼす状況が生まれ、教育課題としても意識せざるを得なくなった。それで、70〜80年段階では、せめて誤った性情報に流されないようにと考え、自分の専門領域である保健分野の受講生を対象にしての性の生理や発達、性の健康といった内容を扱う程度であった。しかし、ほとんどの学生が教員志望だと考えると、そういう内容や受講範囲ではダメと考えようになり、一大決心で、すべての学生が受講可能な一般教養科目で「人間と性」という科目名で開講するように意識化したのだった。それは90年代に入った頃だった。

自分の専門領域を超える「人間の性やジェンダー」といった領域に足を踏み込む必要を感じたのは、子どもや若者の文化・生き方に関わる背景に大きな異変が生じていることと、そうした児童生徒に関わる教員になる学生を育てる大学で、性やジェンダーについて学べる機会を何も保障していない問題性を感じたからだ。つまり、性やジェンダーを正面から教えられる教員が大学に存在しないこと。また、大学がその必要性を感じていない状況もあったからである。そうした現実には、専門の教員枠が極めて限定された小規模大学では、各教科専門枠を超えた総合科目的な分野の教員の採用枠はないこと。同時に、日本では性の教育を専門職として養成する大学や研究機関も皆無に近い状況にあることの問題をも痛感させられたからだ。今もこの状況はほとんど変わっていないといえる。

私の開講した「人間と性」の講義内容は、定年退職する2011年度までの16年間に少しずつ膨らんでいった。ここではその詳細は述べられないが、一貫していたのは次のようなことである。ねらいとしては、①自分の性意識（セクシュアリティ）を問いただす、②性の学力（学ぶ力）を身につけ、自身の生きる力にする、③多様な性の子どもと向き合えるセンシティブな感覚を身につけ、性を教育

の課題にできる素養を養う、の3点でだった。内容的な変化は、最初はやはり自分の専門的な領域でもある性の発生・成り立ちや多様性、男女の性成熟、性感染症や中絶と避妊、といったものが軸であったが、徐々に、人間の性的欲求と性の文化・商品化、性暴力、性と人権・関係性、マイノリティの性(障害者・LGBT)、ジェンダーと性、学校教育と性、等へと広がっていった。

2 1990年代から2000年代における

性とジェンダーを巡る動向

こうした大学での取り組みの時代背景には、私は当時それほど意識して実践していたわけではないが、次のような社会的状況の変化があった。1975年、国連は国際女性年としての集会を開き、「女性に対するあらゆる形態の差別の撤廃に関する条約」を成立(79年)させ、日本でも85年に「女性差別撤廃条約」を批准するという動きをもたらしていた。そうした世界的なジェンダー差別・格差改善の状況が女性解放運動(フェミニズム)と重なって広がったが、わが国では、純粹にジェンダー平等社会を目指すというよりは、その動向に便乗する形で、政府は急速な少子高齢社会の先行きを案じ(若年労働者の減少と被介護者の急増)、女性の労働力確保の観点から「男女共同参画社会」を見込んだ政策をからめて志向し、99年にそれを法案化したのだった。

そうした状況下で、男女に関わる様々な社会的問い直しをする動向が生じ始めた。それまでの「家(うち)の主人」や「内(うち)の奥さん」「オレの家内」「内(うち)の嫁」の言い方があちこちで疑問視され、また職業名の「看護婦や保母」が「看護師・保育士」となり、「両性の職業にもなっけて行った。学校では男子にも「君」でなく「さん」と呼んだり、「男女別の名簿」が混合名簿に変更されたり、男女対等意識が急速に活発化する事態となった。

こうした80年代を中心に徐々に広がってきた男女平等の社会づくりの動向は、学校教育の中での性教育(1992年度、小学校4年生の教科書に性成熟の内容が入り「性教育元年」と言われた)や「男

らしさ・女らしさより、まずは人間らしさ」を考えさせるジェンダー平等の教材が国語教科書に入る(例・「ちよつと変じやない?」教育出版・青木やよひ)とか、「かくれたカリキュラム (Hidden curriculum)」、つまり先の呼称や名簿、服装や鞆等の色、教師の無自覚な男女の役割意識での対応など」の見直しなどにも影響を及ぼし、教師たちもこうした研修や自己学習をしながら風通しのいい教育を推進しはじめたのだった。ところが90年代の後半から2000年代になると、そうした動向に政治的なバックラッシュ(反動)が急に押し寄せてきたのだった。

3 その後のバックラッシュ問題と

日本の学校に及ぼした影響

前述した世界的な動向が、日本でもそのまま進捗すれば、性教育もジェンダー社会の実現も一歩も二歩も前進したと思われるが、後退する事態が急に生じる状況が発生した。2002~05年には「性別特性論」が保守派の政治家から持ち上がり、「選択的夫婦別姓制度」への改正に対し「家族の一体感を壊す」という激しい反対の運動が生じた。また、「新しい教科書をつくる会」は、議員に働きかけ、教科書からジェンダーの用語や従軍慰安婦の記述を削らせる運動を行ったり、七生養護学校の性教育に国会で議員が「過激な性教育」批判をするなど、様々なバックラッシュを起こしたのである。また、「ジェンダーフリーはフリーセックスを招く」等の極端な主張を行うなど、「ジェンダー」概念そのものを葬るような動きさえ生じさせた。

こうしたバックラッシュの動向が生じ、2002年に始まる安倍長期政権下で、ジェンダーギャップ(男女不平等)やジェンダーバイアス(男女は異なる)はほとんど改善されず、取り組みを自己規制せざるを得ない状況を全国的にもたらし、停滞・後退を余儀なくされたのだった。

2023年度の世界における日本のジェンダーギャップ指数は、4分野の総合で146カ国中126位であり、政治面138位、経済面123位、健康面59位、教育面47位と評価された。政治・経済

面では先進国中、ほぼ最後尾に甘んじ、ここ数年だけで見ても、むしろ後退した状況となっている。

しかし他方で、近年の夫婦別姓問題や性的マイノリティの人権・差別問題、性暴力問題での #me too 運動など、性やジェンダーをめぐるわが国市民の動向は、国際的な人権運動とも関わって、政府も多少とも動かざるを得ない状況（G7でのLGBT理解等）を生み、歪んだ法（LGBT理解法）ではあったものの、そのことで遅れていた仙台市でもパートナーシップ制度（性的マイノリティの婚姻関係）を認める方向に動くなどの状況も生じてきている。

4 最近の「新しい戦前」という空気感とジェンダー問題

こうしたジェンダーを巡る政治的なバックラッシュとそれを押し戻そうとする市民の動向は、必ずしもこの分野だけの問題ではない。ジェンダーは、生存や平和、人権や平等といった人間の尊厳に関わる一分野だけに、憲法改変問題等とも関わって総合的に考える必要がある。

最近の日本の情勢として「新しい戦前」という空気感がメディアを通して聞かれるようになった。昨年末テレビでタモリ氏が2023年という時代について問われ、「新しい戦前になるんじゃないんですかね」と発言し、その後ネットでいろんな人がこの問題に関連して発言するようになった。ロシアがウクライナ侵略の戦争を始め、その長期化の中で、北欧や東ヨーロッパ地域の軍事的緊張を高めた。また日本では台湾を巡る米中の緊張の高まり、北朝鮮のミサイル発射を口実に軍事的防衛政策を一気に高めた。安保三文書の閣議決定以降、一気に大軍拡を押し進めている。こうした状況が2年近くも継続・進行する中、またこの数ヶ月で、イスラエルとパレスチナ自治区が戦時下に入り、万のつく死者が生じ、市民の女性や子どもの多くの命も奪われている。

「新しい戦前」の特徴として、ジャーナリストの金平茂紀氏は、次のような諸点を挙げ、論じている（『人間と教育』誌119号・23年）。一つは自由が奪われていくこと（表現・言論・出版・集会・結社・報道・

思想や信条等）で、メディア番組の統制的動きが水面下でなされている。二つは、ナショナリズムが高揚すること（戦前には日本を「神の国」と教えられ、皇国民教育で洗脳されたが、近年、道徳の教化がなされ、愛国心と国旗・国歌を学校や様々な諸行事で当然のごとく遂行されるようになっていく）。三つは、様々な場での監視が強まること（至るところに設置されている監視カメラ、個人情報の一元的国家管理・マイナンバーカードはその典型、等）。このような危うい社会状況下では、様々な分野で政治的反動が生じ、大衆はそれに逆らう言動を慎む状況が生じる、と述べている。

確かに、こうした動向と関わって、権力者の巧みな言い換え発言がメディアを通じて大衆に拡散される現象が生じている。国防意識に関しては、ロシアの戦争や台湾有事・北朝鮮の動向等で世論を煽り、「国民の命を守る」との軍事的抑止論を強調し、「防衛」費の名のもとに膨大な軍事費の増大や「防衛産業（強化）支援法」（23年6月）をも通してしまった。そして、あれだけの甚大な惨禍をもたらした福島原発にも、わずか10年で国民生活維持に不可欠と「原発維持論」を主張し、原子力発電所の60年を超える運転を認める新たな認可制度「GX（グリーン・トランスフォーメーション）脱炭素電源法案」（23年5月）という延長法を、いかにもクリーンなイメージで国会を通過させてしまった。

ジェンダーに関わる動向や教育の動向は、平和や生命・人権問題と無関係でなく、憲法の9条（戦争放棄）、13条（個人の尊厳）、14条（法の下に平等）、24条（婚姻・男女同権）、25条（生存権保障）、26条（教育を受ける権利）に関わる問題でもある。今日の世界情勢のもとで、わが国にもこうした人間にとつての基本的な条件が問われているのではないか。

5 ジェンダー問題と学校・教育の課題を改めて考える

こうした大局的な時代情勢の中、最近改めてジェンダーや性の教育のあり方について考えようとする動向が、メディアや教育に関する情報界（教育雑誌やネット・新聞等）で広がってもきている。こ

ここで、改めて学校・教育の課題として問題を共有してみたい。

今から10数年前の教員志望の宮教大生の状況であるが、約300人いた「性・文化・ジェンダー」の受講生に授業前に「ジェンダーの概念」について問うた際、「よくわかる」は約1割、「何となくわかるが」が約4割、「よくわからない」が約半分だった。高校時代までに「ジェンダーを意識する情報に出会った経験はあるか」の問いでは「ある」としたのは約4割いたが、「授業で学んだ」は1割もいなかった。こうした状況は、その後バックラッシュが続いたこともあり、今もほぼ変わっていないのではないかと思われる。

人種差別や性差別（男尊女卑）問題は世界でも日本でもかなり古くからあり、それに対する女性解放の思想や運動は一部の女性人権家（平塚らいてふ）たちにより明治末に始まるが、女性の参政権は戦後の憲法まで保障されなかった。男性だけの政治判断で戦争にめり込んだ戦前の教訓も、充分学ばれていない（学生たちは女性の参政権が戦後になってからの認識はほとんどなかった）。ジェンダー概念を使つての活動が始まるのは1990年代になってからであるが、それも教育界、とりわけ初等・中等教育の内容（学びの対象）にはなっていないのが現実だといえよう。

GenderはSexと共に、昔から「性」を意味する用語としてあったが、生物的性をsex、社会文化的性（人が育つ過程でつくられる性差や役割）をGenderと区別し、性差別からの解放として意識的にジェンダー用語が使われるようになったのはまだ半世紀にも満たない概念であり、大学生の多くにもそれが共有されていない。

先に示した日本のジェンダーギャップ指数は、後進国であることを記したが、教育分野では何とかが中位にあるもの、それは進学率等での男女格差がそれほどないことによるもので、性教育やジェンダー教育という教育内容の普及とか、学校や教員のジェンダーセンシティブによる「隠れたカリキュラム」の意識問題ではかなり低い国の一つと聞いていいであろう。私の感覚では、そうした教育界の現状（文部行政を含む教育政策）が、今日の政治・経済面でのジェンダーギャップ指数（議員等の男女格差や企業での役職・賃金格差等）

を世界の後進国にし、学校での管理職格差等も生んでいる一大要因ではないか、とさえ思えるのである。

また、子どもたちの生きづらさの要因は、今日の社会の中では多様にあるけれども、その一つにジェンダー問題が絡んでいるように思われる。男女が一緒に生計を共にし、誕生した子どもを一人前に育むということは大変ではあるが、困窮している課題は、この問題と大きく関わっているからである。戦後の婚姻数の減少傾向に対し、離婚数が増加（近年では横ばい）の動向があり、そのことが、一人親家庭の増加にも繋がっていると考えられる。直接的に教育課題といえないけれども、性と関わつての関係性をどう育てていくかということも教育に関わる課題であろう。格差社会や貧困問題に関わる課題は、環境問題・平和問題等とも関わつてSDGsの課題であり、ジェンダー問題も含めこれからの社会的な生き方に関わる学習内容と位置づける必要があると思われる。

また、性の多様性に関わる発達上の生きづらさの問題も、今日的に大きな教育課題である。こうした問題に対する教職員のセンシティブな感覚は、「隠れたカリキュラム問題」とも関わるし、教科等での学習内容や指導のあり方等にも関わつてくる課題であろう。

最後に、私はかつて宮城教育大学の「人間と性」の授業でも話し、著書『10代の性をめぐる問題と性の学力形成』かもがわ出版（2010年）に書いたこともあるが、性やジェンダーを学ぶことも学力（小・中では「基礎学力」としておさえ、その学ぶ内容や学ばせ方を一般化する必要があると考えている。その中身は、ここで提示できないが、ぜひ義務教育段階までに身につけさせたい中身を実践的に創り出し、共有したいものである。

（宮城教育大学名誉教授・みやぎ教育文化研究センター運営委員長）

お詫びと訂正

前号112号、小野寺勝徳さん「授業への招待⑩」にある図「牛乳のちがいに、誤りがありました。訂正するとともに、お詫びいたします。

【A青バック厚子牛乳】有害菌は生きている（誤）↓有用菌は生きています（正）

LGBTQの授業

矢部 智江子

なぜこの授業をしようと思ったか

10年以上前、学校現場ではジェンダーフリーの考えから男女混合名簿や男の子を「さん」で呼んだりすることが始まりました。しかしその時は、子どもたちにはその意味について話されることはなく、ジェンダーの問題について何も理解させていませんでした。私は、その時から性の問題については、授業をすることこそが大切なのではないかと思っていました。

また以前に生徒指導の研修会に出た際、小学校の時にLGBTQについて学習しないと、中学生になって自分がLGBTQだと思ったときに、とても悩んでしまったり、不登校になったり、リストカットをしたり、最悪自殺を図ったりするということを知らされました。ですから私は、高学年を持つたら、必ずLGBTQの授業をするようにしていました。

1 時間目の授業

今回は、小学校5年生9人を対象にした実践です。

この授業は、学習参観日に行いました。学習参観日にしたのは、子どもだけが理解していても、いざ自分がそういう場面に直面したときに、家族の理解が得られないと、とても苦しくなると考えたからです。

子どもたちは、LGBTQについて全く知りませんでした。それで1時間目は、LGBTQとは何かについて理解してもらおう授業にしました。

子どもの興味や理解を促すために動画を準備しました。1つは、「いろんな性別〜LGBTに聞いてみた〜」(3分19秒)。これは、動物がLGBTについて話していて、子ども向きの分かりやすい動画です。次に、クローズアップ現代「子どもの性同一性障害」2015年2月15日(7分21秒)。これは、男性として生まれたけれども性自認は女性の小学生が、苦悩する動画です。これを見て、子どもたちは、体の性と心の性の不一致に悩む人がいることを初めて理解しました。

次に、自分や友達や家族がLGBTQだったらどうしたらいいかを考えさせて、1時間目を終わりました。

この授業が終わってから、クラスの子の母親からお手紙をいただきました。娘が小学生のうちにこのような授業を受けられて良かったこと、実は自分が中学生の時に、トランスジェンダーの友達から告白されたことがあつたけれども、何のことか分からず、理解してあげられなかったことなどが書かれていました。

2 時間目の授業

2時間目は、中学生のトランスジェンダーの話がドラマ仕立てになっている人権啓発ビデオ「あなたがあなたらしく生きるために 性的マイノリティと人権」という動画を見て、実際には、どんな風に性的マイノリティの人は悩むのか、私たちは、それに対して、どんなことができるのかを考える授業を行いました。

ここで教えたかったことは、友達が性的マイ

ノリティーかもしれないと思っても、そのことを自分から聞いたり、カミングアウトを促したりしないということです。

子どもたちは、話を聞いて支えたいと思っていたのに、カミングアウトを促すのは控えた方がいいことを知り、考えたことと違って、対応の難しさを感じたようでした。

3 時間目の授業

3 時間目は、実際の性的マイノリティーの人たちが、自分をさらけ出して、明るく話している動画を見せました。動画は、「小学校高学年版『いろいろな性って何だろう』認定特定非営利活動法人 ReBit (1)」です。この中のクエスチョニングの人とゲイの人を取り上げて、友達に言われて苦しくなった言葉やうれしかった言葉、昔の自分に言いたいことなどを読み取りました。

次に、いろいろな個性のある人が、楽しく暮らすために、どんな工夫ができるかについて子どもたちに考えてもらい、動画の中で言われていることを確認しました。それは、「普通」や「当たり前」を押しつげず、お互いの違いを大事にするということでした。

4 時間目の授業

最後の授業は、今、日本で問題になっている「同性婚」について取り上げました。同性婚を望む人たちが、ただ一緒に暮らせるようになるだけでは、たくさん不都合や困ったことが起こる現状を知らせ、自分たちにできることを考えてもらいたいと思いました。

最後に、レインボープライドパレードの動画を視聴させ、なぜこのようなパレードをしているのかを考えさせてから、また自分たちにできることを話し合わせ、授業を終えました。

4 時間の授業を終えての子どもの感想です。

今日は、同性婚を中心に勉強しました。日本が同性婚を認めていないことは知っていたけど、世界で見ても、197カ国の34カ国、約20%の国しか認められていないと知って、びっくりしました。日本では、同性婚ができなくて、デメリットも多いのに、国が先送りしていて、LGBTQの人たちが、かわいそうだなあと思いました。

そして、レインボープライドパレードというパレードの動画も見ました。これでは、偏見もなくなったり、当たり前だと思ってもらったためだったり、LGBTQの人たちはもつといて、つながりを広げるためにひらいているそうです。僕は、こんなパレードがあることも知らなかったけれど、LGBTQの人たちだけを苦しめない、幸せな生活を送れるような工夫をできるように考えて、行動していきたいです。

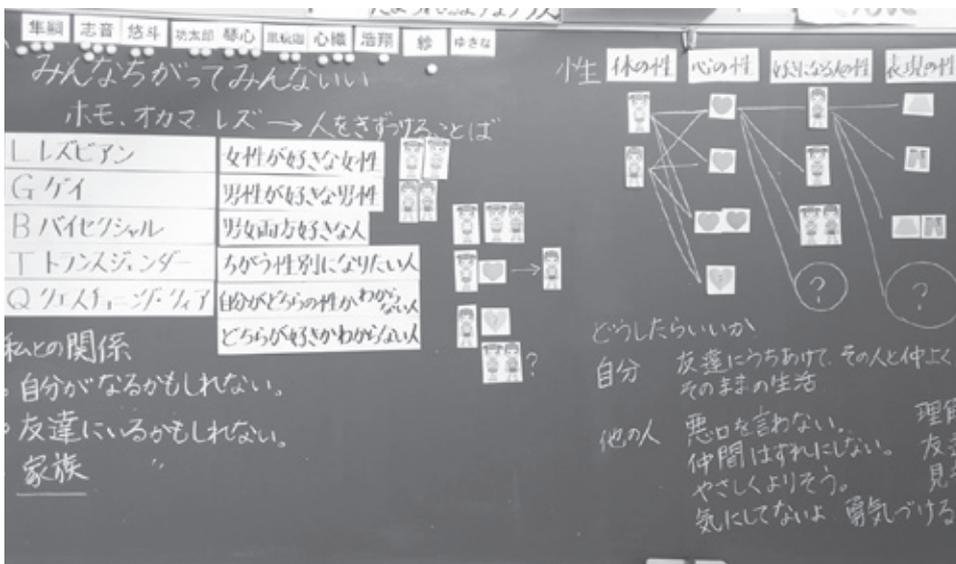
4 時間の授業をふり返って

今回の4回の授業で、子どもたちは、性的マイノリティーの人たちのことを、ある程度理解した

と思います。もし、中学生になってそのような人たちに会っても、「変だ」とは思わなくなるでしょう。また、その人たちの様子を観察して困っているようだったら、声をかけられるようになるのではないのでしょうか。

今後は、LGBTQを取り上げた授業だけでなく、世の中に隠されたたくさんジェンダーを読み解き、ジェンダーフリーの感覚を養う授業も必要だと感じています。

(元小学校教員)



シリーズ42回目というのは運命を感じた。年齢？ 体重？ 身長？ それはさておき今回原稿依頼に、快く(?)引き受けたものの、正直「先生って、人だけじゃないよな」と思いつつ。自分の半生を振り返る意味でも、良い機会だと前向きにとらえながらつづつていこうと思つた。

① 「大森もりもりく！」(幼稚園時代)

「大森もりもりく！」が口癖だった大森智子先生。盛岡市の幼稚園「もみじが丘幼稚園」。園までの道は、長く険しい上り坂(たしか園バスで通園だったので、つらい！という記憶はないが)。ようやくたどり着いたころに決まって待っていたのは、大森先生。おっきな身体に思いつきり毎日飛び込んでいった。あの安心感はなんだったのだろうか。20年前の教員なりたての頃、岩手大教育学部附属小学校へ複式学級の研修会があり、せっかくなので会いに行こう！と思ひ、突撃訪問を試みた。年賀状を今でもやりとりしていて、決まり文句のように毎年書いている「いつか会いましょう」が実現した日だった。園長になっていたことに驚いたが、もっと驚いたのが会うや否や「山形のしんちゃん！」とすぐに呼んでくれたことだった。そんなに昔と変わっていないのだろうか。童顔？ 体形？ 雰囲気？ 何を根拠に気付いたかは分からないが、何百、何千人もの園児とかかわっていたのに、秒で認識した大森先生は、すごい。これを書いているうちに年賀状の典型的な丸文字と

自画像のイラストが見たくなってきた。今年も年賀状書いてみよう。

② 「ひろい世界へ出ていこう」(小学校時代)

小学校を2回転校し、仙台市立の①校庭と校舎が道路をまたいでいて②歩道橋でつながり③校庭に行く時には、長いすべり台を降りていける小学校に4年生の3学期から在籍していた。長いすべり台で思い出したが、ジープの短パンとすべり台の相性が悪く、一年前半そで短パンの友人はよ

「ひろい世界へ」。あのイントロのピアノ伴奏を聴くと今でも当時からよみがえる。野外活動で泉ヶ岳に登った時も、頂上で歌った。私の歌好きは、きつとここから始まったのだろう。

③ 「もしかして、ニッケネームの名付け親!」(小学校時代)

「やましん」と先輩方や親しい(もしかしたら親しそうなふりをしてくれる(笑))後輩に呼ばれるニッケネーム? あだ名? 略称? いつから定着したのだろうか……と考えていると、思い出した! 小学校6年生の担任。細身で髪型は年中くるつくのパーマをかけていた佐藤喜美子先生。ペランダでよく遊んでは怒られを繰り返して、バレンタインデーにはクラスの女子全員から非難を浴びたことくらいしか覚えてないが、きつと喜美子先生が名付け親である。今思うと、担任から言われた呼び名が気に入って、今でも周囲から呼ばれることに喜びを感じている自分がある。喜美子先生のご両親は「人を喜ばせることが美しい」という思いを込めて付けられた名前なんだなあ。と勝手に想像している。たしか結婚されて名字は「大森」になったような。

「大森」ってことは、①にループしてる!? それで、大森もりもり先生は結婚して「斉藤」になった。「斉藤」といえば、中学3年の担任「齋藤敦子先生」。続きは、いつか…。

(利府町・小学校教員)

わたしの出会った先生 42

「やっぱり先生ってすごい」

山形 慎一



く太もも裏を「ギツ」とやっていた。3学期の3か月という短い期間だったが担任だった山中泰彦先生。背丈がすらつとしていて、馬のような面立ち。特徴的なのは、喉ぼとけと天然パーマ。音楽の合唱の時には、そこから出る「ギリギリの裏声」。今なら笑って授業が進まなそうだが、クラスのみんなはその真剣に裏声を出し、顔の血管が浮かび上がってくる必死さに圧倒されていたと思う。5年生の時には、隣のクラスの担任だったが、年中合唱曲を合同で歌っていた。特に覚えているのは

宮城県における

運動部活動の

地域移行の現状と課題

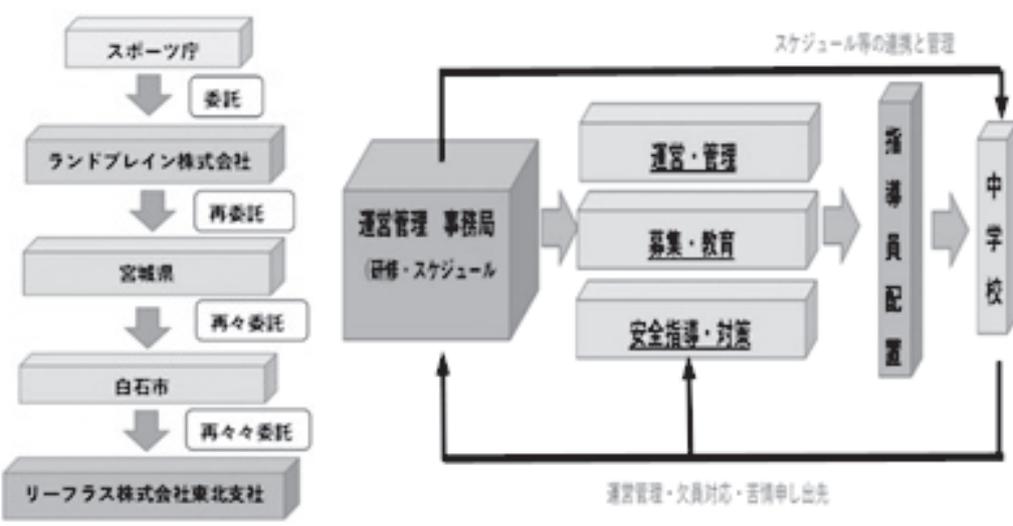
久保 健

センターの『研究年報』3号（2023年6月）に、「部活動の地域移行を窓口に新しい社会の主権者を形成する教育課程を考える」という論稿を寄せました。今回の小論では、そこで書いたことを踏まえつつ、宮城県における運動部活動の地域移行の進行状況と課題について検討してみたいと思います。（本稿で詳しく述べられなかったことについては年報を参照して下さい）

1. 全国的な「部活動地域移行」の現段階

政府は当初、2023年度からの3年間を休日の部活動の地域移行の「改革集中期間」と位置づけていました。そしてその初年度である2023年度のスポーツ予算の概算要求は約460億円（そのうち部活動の地域移行関連分は約115億円）にものぼりましたが、その後、地域のスポーツに関する諸条件（施設、指導者、経費など）の実態が明らかになるにつれて、こ

の「改革集中期間」が「改革推進期間」にトーンダウンし、スポーツ予算は約359億円（約104億円減。部活動の地域移行関連分は約36億円）に削減されました。この金額は、東京オリンピックが開催された2021年度（約350億円）、および、部活動の地域移行が本格的に議論された2022年度の額（約353円）と比べると、ほんの少ししか変わっていません。さて、スポーツ庁は、2023年度からの3年間がまだ「改革集中期間」とされていた2021年に、「地域運動部活動推進事業」を開始し、全国に公募を行いました。ここでは、スポーツ庁→県教委→市町村教委へと事業が委託され、そこからさらに、〈総合型スポーツクラブ・民間企業・大学〉などの事業の運営主体に委託される「実施イメージ」が示されていました。また、予算に関しては、市部の場合、



1校あたりの「スポーツ庁委託費積算単価」が、指導者の謝金（年間：5部活×3時間×45週×1600円＝1080千円）を含んで1675千円と示されていました。

2. 宮城県と白石市の2022年度の取り組み

宮城県では、スポーツ庁の2022年度の「地域運動部活動推進事業」の公募で2件の応募が認められました。その1つが宮城県の県立古川黎明中学校、もう1つが白石市の白石東中学校での取り組みです。その2022年度の「成果報告書」には、どちらについても5つの部活動で取り組みがされたうち2つの部活動について具体的に記述されています。

そのうち、白石東中学校の取り組みについて見てみましょう。ここでは、剣道・サッカー・バレーボール・卓球・陸上のうちバレーボールと陸上について報告されています。

バレーボールの取り組みは、①参加者数：14名、②活動日：土曜日・日曜日、③活動場所：中学校、④指導者：1人（生徒保護者を指導者として雇用）、⑤参加会費：なし、となつています。また、陸上の取り組みは、①参加者数：21名、②活動日：土曜日・日曜日、③活動場所：角田市陸上競技場・白石川緑地公園、④指導者：2人（白石市スポーツ協会からの推薦）、⑤参加会費：なし、となつています。

もう少し具体的な内容に立ち入ると、第1に、休日の活動参加者は平日の部員と原則として同じです。つまり、中学校の部活動の休日の部分について、地域の指導者が派遣されてくるというイメージです。第2に、活動日の「土曜日・日曜日」とは「両日とも」なのか「いずれか1日」なのかは不明です。第3に、活動場所について、角田市陸上競技場の場合は使用料を生徒が負担しています。第4に、指導者について、古川黎明中の場合は「ボランティアコーチから雇用」「一般求人からの応募」となっています。第5に、参加費はすべて「なし」となつていますが、これは、国の予算から運営主体に委託料が支払われている

ためです。第6に、その運営主体は、どちらのケースも（株）リーフラスというスポーツ関係の企業が委託されて担っています。その際、リーフラスが行うのは、休日の部活の指導者を探して派遣することと、実施した成果と課題を明らかにすることです。

3. 宮城県と角田市の2023年度の取り組み

その後、宮城県は、2023年3月に公立中学校や各市町村に「学校部活動と地域クラブ活動等のガイドライン」を通知しました。この中では、2023年度を「各市町村などで課題解決の協議や生徒らへの説明を行う移行検討期間」とし、2024年度から「準備が整った市町村から地域移行を進める改革推進期間」としています。また、学校の部活動について、①週当たり2日以上（平日は少なくとも1日以上、週末は少なくとも1日以上）の休養日を設ける、②大会参加等で活動した場合に休養日を他の日に振り替える、③活動時間は平日2時間程度、休日3時間程度とし、朝練習は原則禁止する、等の基準が示されています。

そうした中で、古川黎明中学校と白石東中学校の2023年度の取り組みは、「地域運動部活動実証事業」として継続されていますが、新たに角田市の取り組みが加わりました。ここでは角田市の取り組みについて簡単に紹介します。

角田市には中学校が2校あり、合わせて30近い部活動が行われていますが、2023年度は、角田中学校：7種目、角田北中学校：3種目で取り組みが行われています。そしてここでは、地域部活動の運営主体は、市の総合スポーツ施設である「かくだスポーツヴィレッジ」の指定管理事業者（運営共同企業体）の一つが中核となつて担っています。

この取り組みの状況については、また始まったところで、詳しい内容は聴くことができませんでしたが、地域部活動の運営主体が異なること以外は、宮城県や白石市の場合とほぼ同じよ

うでした。

4. 岩沼市のモデルプラン

次に、少し性質が異なる取り組みとして、岩沼市の取り組みについて見てみましょう。岩沼市では、2019年度から市独自の部活動支援事業（学校部活動への外部コーチの派遣、市で行うスポーツ教室への中学生の参加）を行ってきています。そして2021年度から部活動の地域移行のモデルの検討を始め、2022年12月に「学校部活動及び新たな地域クラブ活動等の在り方に関する総合的なガイドライン」を策定しました。ここには、学校部活動は、オフシーズンは週2日16時30分まで、ハイシーズンは週3日＋土曜日とし、休日の部活動は地域に移行するとされています。

そしてその後、2003年7月に「休日の部活動の段階的な地域移行について」というモデルプランが発表され、それに基づいて2023年10月からまず陸上・バドミントン・卓球の3種目で取り組みが開始されました。これは、4つの中学校が自転車を通える範囲にある岩沼市の強みを生かして、市の総合体育館などに生徒を集めて休日のスポーツ教室を行うというものです。ここでは、市内の体育施設の指定管理者であるフクシ・エンタープライズという企業が運営主体となつて、市と連携協定を結んでいる仙台大学の学生らを指導者として派遣しています。今後、2024年からサッカー・バスケット・野球、2025年からソフトテニス・ソフトボール・バレーボール・剣道……と続いていく予定です。

またこれと同時に、今後の部活動の地域移行の運営主体について4つのモデルケース（①保護者を中心に団体を組織する、②保護者を中心にスポーツ少年団を組織する、③総合体育館が開くスポーツ教室に参加する、④既存のクラブやスポーツ少年団に参加する）を示して、いずれかを選んで取り組みを始めることを呼びかけています。

これらの場合、指導者は、前述した派遣システムの他、市で「コーチバンク」を設けて各運営主体に派遣する仕組みをつくることも考えています。また、活動の場については、市の総合体育施設に4校の生徒を集めて指導する形と、各学校での部活動に外部コーチを派遣する形とがあります。前者では、各学校の部員等のうち希望者が参加することになり、学校部活動の部員と異なった参加者となる可能性があります。さらに、必要経費については、これまでの市のスポーツ教室や外部コーチ派遣は市の経費（運営主体への委託費）でまかかってきていますが、今後この事業が拡大していった場合には有償（受益者負担）となりそうだとのことです。

5. まとめにかえて

これまでに見てきた幾つかの取り組みは、比較的小さな（学校数の少ない）自治体での、週1回（月4回）の休日の、部の数を限定した取り組みです。これが今後、各学校の全ての部へ、仙台市のような大きな自治体を含む全県へ、さらに平日の部活動へ……と拡大していった時にどんな事態が生じるでしょうか。

これに関して、前述したリーフラスの報告書が参考になります。この会社は全国9支社で18自治体・学校等の委託を受けて事業展開していますが、その報告書「地域運動部活動推進事業の現状」を見ると、現在行っている事業については「うまくいっている」という調査結果が示されていますが、同時に、幾つか課題となることも書かれています。その主なものは例えば、①今後、部活数が増えた場合には指導者の充足に懸念がある、②現在は学校の施設を使用しているが、学校施設以外で活動することになった場合には施設の定期的な確保が難しい、③受益者負担による運営も可能と考えるが、保護者等の理解を得るのに苦労する、④経済的な問題のある家庭へは補助が必要、⑤国からの支援が無くなった場合に、地方自治体が予算化するの

非常に難しい、⑥中体連などの大会への参加の仕組みが地域部活動にマッチングしていない、⑦委託料が少ない、等です。

これらについて詳しく検討する紙数はもうありませんが、使用する施設の問題、指導者の問題、経費（国の補助がなくなった場合の自治体からの予算や受益者負担）の問題等々、大きな困難が待ち受けていることが予測されます。

最後に、この問題を考える上で外してはいけない観点を3つあげてまとめにかえたいと思います。

1つは、経費の問題については、憲法26条の「義務教育は、これを無償とする」という条文を原点として考えていくことです。現在、さまざまな学校教育に係る経費を削減ないし無償化しようという運動が広がっていますが、その中で「隠れ教育費」というものの存在もクローズアップされてきています。これを部活動に当てはめると、「隠れ部活動費」（ユニフォームやスパイクから、遠征費、保護者による後援会費等まで）は相当な額になります。将来、部活動が学校から地域に完全に移行した場合、前述した憲法26条の箍（たが）が外れるとともに、中学生の地域スポーツ活動にかかる経費の多くが受益者負担になります。親の経済格差が拡大する今日の状況の下で、どの子も豊かなスポーツ・文化・芸術活動を「学校でも地域でも」享受できるようにする、という観点での議論が求められます。

2つめは、部活動の地域移行の運営主体をどう考えるかです。今回取り上げた事例では、運営主体はすべて国や自治体から委託された企業です。この他に、宮城県のガイドラインや岩沼市のモデルプランには、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、保護者のつくる組織などが挙げられています。これらの「非営利」の組織が地域部活動を運営主体として持続的に担っているかどうか、疑問と不安を感じます。

3つめは、部活動の教育的意義をどう考えるかです。生徒本人や保護者の受け止めについての前述したリーフラスの報告を見ると、専門的な技術指導が得られることが、また、教職員を受け止めでも、労働環境の改善（負担軽減）が、プラス要因として挙げられています。しかし、部活動の教育的意義や外部指導者の（スポーツ技術以外の）指導内容の問題に触れているものは見られません。戦後、1970年頃までの学習指導要領では、学校行事や部（クラブ）活動などが「特別（教育）活動」として位置づけられ、教科（学習の指導）とならぶ自主的・自発的活動（行動の指導）として重要なものとされてきました。1960年代末の学習指導要領で部活動が教育課程の外に出された直接の契機は、指導に当たる教員の勤務時間外手当という経済的問題にあり、決して部活動の教育的意義が否定されたためではありませんでした。しかし、部活動が教育課程から外されて50年以上たつ今、多くの中学校教員が部活動の指導は教職の本務ではないと考えるのも無理のないことかも知れません。学校部活動の改革においては、それを歪んだものにしていくスポーツにおける勝利至上主義や芸術におけるコンクール主義を改めることと並んで、部活動（クラブ活動）の教育的意義を復権させることが求められます。それは、生徒たち自身による部（クラブ）の主體的・民主的運営——「何のために部活をやるのか」についての話し合いから始まって、練習計画、レギュラー決め、大会参加の選択、部の予算の獲得と使い方、等々——を行うことが中心になります。そして、教師の部活動の指導はそうした教育的意義にかなう内容に向けられるべきであり、スポーツや芸術等の専門的内容の指導は、本来その専門性を持たない教師の仕事ではないことも、改革の重要な観点です。

（日本体育大学名誉教授・みやぎ教育文化研究センター研究部長）



おすすめ映画

豊永 敏久



『少年H』 ～テレビ朝日開局55周年記念作品～

降旗康男監督 2013年

太平洋戦争前後の神戸を舞台に、キリスト教を信仰する家族の悲喜を描いた、実話に基づく作品である。私が生徒対象に週末に開いている映画会「よティー・シアター」の定番で、日本史の授業でも上映したもの（資料プリント原稿の提供可）。

最大の見どころは、焼夷弾による空襲の恐ろしさをリアルに再現している点だろう。映画でもドラマでも空襲を描いた作品は多いが、たいてい遠景で語られるのみ。仙台市戦災復興記念館にも展示されている焼夷弾が、実際どのように地上に落ちてきて、どう燃え上がるのか。その具体を私はこの作品を見るまでよく知らなかった。わずか数分間のシーンだが最初に見たときは背筋が凍った。そして幼いころ両親から聞いた戦争体験談がその時やっとな像を結んだ。

主人公の少年・H君の父親は洋服の仕立屋だ。「国や言葉は違っても結局は同じ人間や」と外国人顧客を大切に。杉原千敏に救われて来日したユダヤ人たちや、教会を攻撃する人々、共産主義者、性別違和者に対しても偏見がない。戦争によって翻弄される人々の姿は現在のウクライナやパレスチナとも重なるが、迫害や窮乏の中でも分け隔てなく他者を愛し続けることの貴さと難しさについて深く考えさせられる。

その父親がスパイの疑いをかけられ警察で拷問を受けて帰宅したとき、少年H君に向かって「戦争はいつか終わる。その時に、恥ずかしい人間になつたら、あかんよ」と静かに諭すシーンが印象的だ。そのセリフは、平和教育・人権教育にとりくむ私自身への励まし言葉にも聞こえた。国籍や思想・信条に関わらず他者を尊重



する心、時勢に流されず社会を冷静に見つめる眼、政府や軍隊の間違いを的確に指摘する勇氣、それらの必要をこれほど強く感じる作品は珍しい。間違いなく秀作である。

(高校教員)



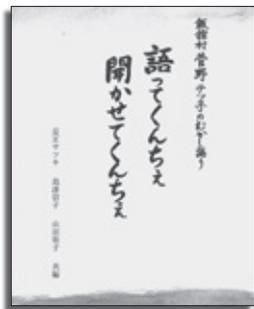
読書のすすめ(第14回)

中野 典子

おすすめBOOK

飯館村菅野テツ子のむかし語り 『語ってくんちえ 聞かせてくんちえ』

長正サツキ 島津信子 山田裕子 共編



菅野テツ子さんは福島県飯館村で生まれ、夜なべをするお母さんの傍らで、毎晩昔話を聞いて育ったそうです。村一番の語り手だったお母さんの昔話を聞くのが小さい頃の一番の楽しみだったと話すテツ子さんは、お母さんが亡くなってから、人の前で昔話を語るようになります。2014年、「みやぎ民話の会」会員の山田裕子さんたちは、原発事故で全村避難を余儀なくされて松川町の仮設住宅に住んでおられたテツ子さんを尋ね、話を聞きます。採訪は2019年まで続きます。テツ子さんは昔話だけではなく、飯館村や村での暮らし、周囲の人たちとの心あたたまる交流、幼い頃の思い出、原発事故

後の避難生活など、話してくださったそうです。テツ子さんから聞いた話をまとめたのが、この1冊です。この本は2つの章からなっていて、第1章は昔話と、テツ子さんが村で聞いた、またご自身が体験した不思議な話やおもしろい話です。第2章は、テツ子さんが生まれてからこれまでのことが、ご自身の語りの形で書かれています。

第1章には、昔話が56話収められています。「屁つたれ嫁さん」はおもしろくて、何度読んでも笑ってしまいます。そして、「女はたくましいなあ」と嬉しくなります。と同時に、ひたすら耐えることを強いられた女の人たちの切なる願いを感じます。テツ子さんの語り口はあたたかくて、読んでいると、ほっこりとした気持ちになります。

テツ子さんにとって、飯館村は何ものにも代え難い、大切な所でした。あの一瞬の事故で村を追われ、二度と戻れないという選択をせざるを得なかったテツ子さんは、こう話しています。「……もう10年もたったが、1日だって飯館の我が家のごと思わね日はねえわ。……」と。何と罪深いことが、原発は。

我が家のこと、大好きな飯館村のことを想いながら語り続けたテツ子さん。テツ子さんに思いを馳せて、本を読んでみませんか。「むがあすむがす……」と、子どもたちに読んであげませんか。

(購入時の連絡先) 山田裕子さん Tel. 022-358-2314 頒布価格1,000円

(元小学校教員)



卒業生たちとの 繋がりから考える

みやぎ教育相談センター相談員 内記 英明

10月、私が正教員になって初めて担任をしたクラスの子どもたちのクラス会（50歳を祝う会」と銘打っている）がありました。自分たちのクラスに関わった先生方にも案内をしたいので声をかけてほしいというので、担任として関わった2人の先生にも呼びかけ、参加してもらいました。

集まったのは30人程で、所在がわかっているだけでたまに会っている子、最近偶然に会った子もいれば、卒業以来32年振りに会った子など様々です。皆いい大人になっていました。

クラス会は今が初めてではありません。これまで公式には2回程行われていて、そのうち1回は、私は都合が折り合わずに欠席しました。

また、クラス会とは趣旨を異にしますが、私の定年退職の時には、わざわざ私の地元で「退職！ご苦労さん会」をしてくれたこともありました。

非公式にはちよくちよく仲間内で集まって懇親会や食事会をやっている、そこに誘われて参加したこともあります。最近では、コロナ禍でしたが、都合がつかなかった私はオンラインで参加したこともありました。

なぜこのような交流が30年間も長く続いているのか不思議に思い、いろいろと考えることがあります。

私は1983年から私立高校で講師を足かけ5年、その後、公立高校に移り30年教員をしましたが、初めて担任をしたのが31歳の時で、その時の子どもたちです。

その後、初任校と同じ1学年7クラス前後の高校を転勤によって2校ほど経験し、それぞれの高校で、持ち上がりで3回クラス担任をしましたが、教え子たちとのこれほどの深く長い交流はありません。あるとすればクラスではなく、部活動で3年間一緒だった一部の子どもたちとの交流がある程度で、クラス単位での交流はほとんどありません。

いろいろとエピソードもありました。入学式で、担任が一人ひとりを呼名し、校長が入学許可をし、担任の紹介をするわけですが、私が入学式にいなかったのです。そのことが、今も語り草になっています。入学式2日前に急遽、虫垂炎の手術をして1週間程入院してしまっただけです。初めて彼らと対面したのは入学後1週間くらい経ってからでした。その間、彼らは自分たちの担任がどんな人間なのかいろいろ想像し、不安な気持ちだったと思います。

学校は1学年7クラスで、4つの小学科で構成され、私が担任を割り当てられた学科は2クラス。担任は基本的に3年間持ち上がりで、クラス替えは2クラスの中だけでの入れ替えでした。授業も他学科との交流はほとんどなく3年間2クラス・80人で行ういろいろな活動をし、進級して行く感じでした。ある程度お互いが深く関わられる仕組みになっていました。そういう中で私は、幸いにもこの学科で2年間担任ができたことが大きかったと思います。

卒業時（1990年）はバブル経済の名残が残っていた頃で、就職・進学も順

調に進んだ時期でした。

卒業後、同級生同士での結婚も2組誕生し、一緒に担任をした先生と披露宴に招待されたこともありました。そのほか3回ほど結婚披露宴に招待され、出席しました。

大学進学した子どもたちの中には企業の中堅となり、人事担当で新規高卒者の採用を担当する子どももいて、進路部の就職担当として私が、採用をお願いする立場になったこともありました。

私の経験から、このように見てくると学校規模やクラス規模が、教員と生徒との距離を大きく左右しているのではないかと思います。



「みやぎ教育相談センター」のご案内

TEL 022-272-4152

相談受付内容

進路・不登校・ひきこもり・いじめ・
家庭生活・教職員の悩みなど。

土・日曜と祝日をのぞき10時から17時
ただし夏休みなど長期休業期間は、相談
センターも一定期間、休業日があります。
秘密は厳守します。相談は無料です。

「先生」 つてすごい

小幡佳緒里（弁護士・センター運営委員）

小学生時、授業で初めて手にした「リトマス試験紙」は魔法の紙のように思えた。とにかくたくさんものをリトマス試験紙で実験したい、そんな衝動に駆られた。とはいえ、当時はオンラインショップなどない時代。

そんな私を見て、担任の先生が学校用品の納入業者さんに小売りしてくれるように頼んでくれた。それだけではなく内気だった私を思っつてか、親に、少し遠いけれど一人で買いに行かせてみたらどうかと提案してくれた。

先生が書いてくれた地図を頼りに、魔法の紙を求めて冒険の旅へ。自転車で片道40分はかかっただろうか。やっとの思いで手にしたリトマス試験紙の束は光輝いて見えた。弾むような気持ちで持ち帰り、夢中で実験した。自分のいる世界が広がった、そんな経験だったと思う。

当時の実験結果などすっかり忘れてしまったが、リトマス試験紙を使った授業のこと、地図を書いて渡してくれたときのこと、リトマス試験紙を買えたこと報告したときのこと、その時々「先生」を40年も経った今も忘れることはない。先生の存在って、本当にすごいと思う。

子どもの風景 「作品について」……川村 美和（宮城作文の会）

自分の言葉で気持ちを表現する

「まちにまつたやきいも大会」「この日をずっとまつていました。」龍さんの作品から、やきいも大会をとても心待ちにしていたことが伝わってきます。数週間前に予定されていた全校遠足がコロナウイルスの流行で中止になり、時間をおいてから全校でやきいも大会が行われることになったのです。最近までは、様々な行事が中止になったり、縮小されたりしていました。体育の授業だって、友達との距離を十分に保つた上での運動のみ、座学の授業もグループワークは制限されていました。みんなでわいわい楽しく遊んだり、おいしいやきいもを食べたり、龍さんにとってやきいも大会はとても楽しく充実した時間だったことが文章から伝わってきます。

他にも「やきいもがいがいとすき」「時間まで食べきれないと思っただけど、なんとか食べました」など、龍さんらしい表現が使われているこの作品が好きです。

その子にしか書けない、自分の言葉で気持ちを表現した作品を大切にしていきたいです。

センターの動き

10月

2日（月）ゼミナールScribe『人間とその術』第6回
7日（土）研究部会議
13日（金）第10回事務局会議『学校を改革する』（佐藤学）読書会

11月

14日（土）『教育11月号』を読む会
21日（土）秋のこくご講座『サーカスのライオン』『注目の多い料理店』
23日（月）午前…会館との面談 午後…『道徳と教育』本居宣長①
27日（金）第11回事務局会議
28日（土）2023みやぎ教育のつどい（248名）参加

12月

6日（月）ゼミナールScribe『人間とその術』第7回
8日（水）富谷市授業研修会…成田小、佐藤学講演会
10日（金）第12回事務局会議
11日（土）午前…『教育11月号』読書会 午後…研究部会議
18日（土）第11回高校生公開授業 宮城県民会館会議室 講師…高橋源一郎『ぼくらの学校なんだぜ』高校生17名（1名欠席）、一般84名

1月

2日（土）午前…教育のつどい第4回実行委 午後…民教連70周年記念冊子編集委員会
6日（水）第2回運営委員会
8日（金）第13回事務局会議
9日（土）国語ナヤンデルタール『子

どもとつくる物語の授業』『モチモチの木』『大造じいさんとがん』

11日（月）『道徳と教育』本居宣長②
16日（土）研究部会議
22日（金）第14回事務局会議『つうしん』113号発送作業

編集後記

11月18日（土）4年ぶりに高校生公開授業を行った。講師は、作家の高橋源一郎さん。4月、出版社に連絡を取った。担当の方から「源一郎さんは忙しい方で難しいのではないかと」言われたが、メールアドレスを教えていただいた。「謝礼は少ないが、高校生にぜひ授業をお願いしたい」と思い切つてメールした。数日後に返信があり「OK」だった。事務局員、みんな大喜び。会場はフォレスト仙台がだめで、県民会館が取れた。それから、高校生の募集。各公立・私立高の校長宛の募集のお願いをした。なかなか、高校生の参加者が集まらず心配。高教組の分会長、知り合いの高校教員などに事務局の清岡さんが電話かけをした。そしてわたしも高校生になった教え子などに手紙を書いた。テーマは『ぼくらの民主主義なんだぜ』とお願ひしたが、源一郎さんからは『俺たちの学校なんだぜ』と返事が来た。当日は一般も80名を超え、大盛況。高校生の澄んだ瞳と真剣なまなざしに安堵した。

『学校とジェンダー問題』は研究センターとして初めての特集。問題と課題が見えてくる。多くの教職員、保護者の方に読んでいただきたい。（達）

